



Member's Open Space

電報が詩を教える

●美咲歯科医師会会員
雨田 実



明治、大正、昭和も古い時代には電報の基本料金は、15字を1音信としていた。実際の通信文は平均22字という数字が出ているそうであるという。世の中が進めば、通信文も繁多になるのは当然であるが、ここは詩歌の論として、昔のこととして述べる訳である。電報が15字を1音信としていた時代には、知己の間であれば、急用の消息文でも、15字あれば一応の用が足りるものとされていた。なるべく基本料金を超過しないようにと、人々は指を折りながら文を考え15字にまとめる工夫をした。実はこの場合も料金さえ増せば、そんな工夫も無用なのであるが、規定の枠がある以上、その枠内で用を足そうと工夫する。そうした工夫が、やがて詩を生む心ともつながって来るのである。字数の制限はもとより、文字の配置にも工夫を重ね、ああでもない、こうでもない苦心の末、とんでもない名文が出来上がる。「ダンナハ イケナイ ワタシハ テキズ」などは、名文中の名文といわれたという。文章として見れば、まさに15音字であり、15字詩ともいべき詩格をそなえているといえる。この場合道草のようだが、まず15字詩から説明し、ついで17字詩の古川柳に及ぶのが、順かと思う。

まず電文の成り立ちを述べる。明治9年、九州熊本に蜂起した、神風連しんぷうれんの一隊は鎮台司令官ちんたいの某少将の宿所を襲い、これを斬殺した。同じ寝所に

いた婦人某は、自分も負傷したが痛手に屈せず、床からはい出し、郵便局にかけつけ打電したものとして、世に伝わっているが、そういう想定のもとに、何人かが偽作なんびとしたものであろうと思われる。司令官である師団長格の将軍が、女性といる所を暴徒に襲われたという、武人らしからぬ不覚さをつけている。同時に将軍を即死させ、一緒にいた女性まで負傷させるという、暴徒の残虐ぶりをも遺憾なく伝え、わずか15字の短文にまとめて、この事件を鋭く批判している。「ダンナハイケナイワタシハテキズ」と念仏風のリズムにのせているので、一種の哀調さえ感じられるのである。

歴史に伝えられない、明治初期の内乱の秘聞が、こうした、いわゆる天声人語の形で、世に伝わっていることに注目したい。このように或る内容を持つ短い文章が、リズムによって繰り出される時、その文章は実用を越えて、深い感銘を人に与える。これを短詩と名づけるけれども、この句のような諷刺性を持った短詩は警句とか、寸鉄詩という。寸鉄人を殺す式の錐のような鋭さを持つ詩というべきであろう。

古川柳も、この電文に似た趣きがある。圧縮された内容をリズムによって打ち出し、感銘を深からしめようとする。ただし字数が17字であり、日本の詩と関係が深い、五、七、五のリズムに配分されているために、さらに詩としての一般性を帯

びるに至った。それゆえ17字詩といった方が適当であり、古川柳は最短詩形に属する詩歌といえる。

ふる雪の白きを見せぬ日本橋

宝暦7年(1757年)古川柳として最も古い句とされていて、格調の高い立派な句であり、古川柳としての特色をそなえている。俳句では雪とあれば、それだけで冬の季を示し、寒さを連想するが、川柳の、ふる雪とある、この雪は日本橋のにぎわいを示すためのもので季節は示していない。大体古川柳は無季の句が多く、雪のような季語を含んでいても、季題でないから季節の主張もせず、季題の制約を受けないものであるといわれる。最も区別される場所は、季題と「や、かな」の切れ字が俳句には「五、七、五」のリズムを形成するのに不可欠の要素であるが、古川柳は、そのいずれをも持たないので、いわゆる詩のリズムには遠いといわれる。

明月や門にさし来る波がしら 芭蕉

ふる雪の白きをみせぬ日本橋

並べて見ると、日本橋の句は17字であるから「五七五」に嵌っているが、リズムから来る面白味は余り感じられないし躍動感も見られないが、リズムにはそれとは別に判断に訴え短性を振動させる、声なき声のリズムがある。これを内在律というが、古川柳が詩として俳句と対抗出来るのは、この内在律の面においてであろう。降る雪が白きを見せる、といえ、当然の叙述であるのに、わざと、白きを見せぬと反対の言いかたをしている。しかし下の五字に日本橋とあるので、橋上に人通りの多いことが連想され、初めてなるほどと頷かれる。一旦不合理と思わせておいて、おもむろに正常に引き戻すところが面白い。それには多少とも推理の力が働き、これが曲折をなして、一句を平板に

終わらせないのであり、このような知性に関連したリズムを内在律といい、それが適量に含まれている時により句とされる。この句はそれ故に佳句といえる。この句は今を去る250年も前の日本橋を謳っている。江戸の中心であった日本橋はすでに降る雪も白きを見せぬ程に雑踏していたであろう。詩歌をはなれて古川柳を観察すれば、時代が明記されているから貴重な風俗資料とされる。古川柳には風景描写の句もあるが、大部分は人間や社会を題材にした人事句である。七色唐辛子と同じように、いろいろの味があり、上品な句もあり下品な句もあるが、下品に属するものでも古川柳らしい知性の閃きを持っている。そして下品な句ほど、それをカバーする高度の知性を働かせている。これを古川柳の逃げというそうであるが、いずれご披露したい。

